

FADO

50

Abril 2006

月田秀子ファド倶楽部

TSUQUIDA HIDEKO FADO CLUBE JORNAL

月田秀子の昨日、今日、明日・・・

ちゃんと春が来て、桜が咲き、あっという間に、新緑のまぶしい季節になった。そうこうしているうちに今度は「暑い暑い夏」の訪れだ。

柔らかな若葉に、私は、青春の頃を思い出す。ひたすら走り、駆け抜けたあの青春の日々。人を傷つけ、自らも血まみれになりながら、それでも走りつづけた。あの頃、自身の残酷さにも気づかなかつたのは、未熟であるがゆえ許されることなのだろうか。若者達の眩しいほどのエネルギーを、目を細めながら眺め、彼らに追い越されてゆくわが身を、惨めと思うこともあり、いとおしく思えることもある。

以前に比べ、何か、物腰が柔らかく、高飛車に構えなくなったように思った。でも、鏡に我が姿を映してみても気がついた。それは単に姿勢が悪くなっただけだということに。下腹に力を入れ、胸を張ってみる。それだけで、呼吸が楽になる。声にも張りが出てくるから不思議だ。

前号での「関西ライブ休止宣言」で、皆様にご心配をお掛けしてしまいました。ごめんなさい。

お手紙、お葉書、ファックス、メール、お電話にて、たくさんの励ましのお言葉、元気付けのためのお酒、ワインもいただきました。こんなにもたくさんの方々を支えられて今の自分があることに、身の引き締まる想いがありました。ありがとうございます。

2月の関西でのライブは、シャンソンを歌っていた頃のピアニスト釈惠一氏が、伴奏を務めてくださり、何とか無事幕を下ろすことができた。

ギタリストなしに、お越しくださった皆様に、どうやって私の歌を届けたいのか、下手なギターを弾き語り、酒を酌み交わしつつのおしゃべりライブで勘弁してもらえないかと半ば諦めていた矢先のことだった。

釈氏の登場により、彼のピアノ伴奏による「インシャラー」「暗い日曜日」「かもめ」「スカーフ」等のシャンソンを20年ぶりで歌うこともできた。そのライブを聴いてくださった方の「ピアノでのファドでもいい、何でもいから歌いつづけて欲しい」とのありがたいお声も心に残っている。

心配して最後のライブに馳せ参じてくださった皆様、ありがとうございました。

その後、ブズーキ等様々な民族の弦楽器奏者酒井淳氏、スノニッシュ・コネクションのヴァイオリニスト平松加奈さん、今年から芸大一年生の伊賀拓郎君、京都在住のギタリストM氏、様々な方々との出会いがあった。

そんな中で、今、私は、ポヘミアン的な立脚点から、もっと自由にファドを模索してゆきたいと思うようになった。私が伝えたいのは、ファドの「形」ではなく、「心」なのだからと、そのことが明確に表現者としての私の心に刻まれつつある。

「春は必ずやって来る」例年になく厳しい冬の寒さの中で凍えながらつぶやきつづけた。そして、今、季節は春。今年も、春に置いてきぼりにされた月田ではあるけど、私の心の中の「春」も、きっといつか芽吹くはずだ。

<ふたりの加奈ちゃん、ありがとう！>

ポルトガルギターが抜けたマヌエルでのライブに、3月はヴァイオリンの平松加奈さんが、4月はチェロの竹花加奈子さんが、ギターの蓮見昭夫氏と共に、私の歌を支えてくれた。

特に、ポルトガルギターに代わって響き渡った彼女達のヴァイオリン、そしてチェロの演奏は、かなりの新鮮な驚きでもって迎えられ、そして確かな感動のため息が、一曲一曲終わるたびに、私に還ってきた。

事実、彼らがステージに向かう時から拍手が湧き起こり、ステージを重ねるごとに、従来は音量に比例して会場がざわつき始めるのだが、真剣に私たちの演奏に耳を、そして心を傾けているお客様の熱が伝わってきた。

3月7日の四ツ谷「マヌエル」での出来事は、忘れられない。ギターの蓮見氏の的確なリードに、平松加奈さんのヴァイオリンが人の声のよ

うに、うめき始めたかと思うと、次の瞬間、ツバメのように私の目の前をかすめ、舞い上がり、今度は、うねる波のように、私の心に押し寄せてくる。その響きに私の背筋はゾクゾク、心の闇の中で眠っていた悲しみや喜びが息を吹き返した。歌っていることを忘れ、私もいつしか波になり、鳥になっていった。初めての体験だった。私をしばりつけていた「ファドはこう歌わなくてはいけない」、という呪縛のようなものが、その時解けたような気がする。それとともにポルトガルギターへのこだわりも、氷が溶けるように私の心から消えていた。「ああ、私は生きられる」久しぶりに心が晴れ渡ってゆくのを感じた。

4月は、チェロの竹花加奈子さん。クラシック畑で育った彼女に、レストランで演奏してもらおうのは申し訳ない思いで一杯だったのだが、2週間後に控えた五木寛之氏とのコンサートの半ば練習を兼ねて、「マヌエル」に出演してもらった。ポルトガルギターが抜けた分の殆どを彼女にカバーしてもらった。圧倒的な存在感のある演奏に、最後のステージまでかなりのお客様が残ってくださった。

これからも、時々彼女達に入ってもらってライブコンサート活動を続けてゆきたいと、心ひそかに願っている。

<レクチャーコンサート奮闘記>

1月の横浜・朝日カルチャーセンターでのレクチャーに続いて、2月は大阪阿倍野市民学習センターでレクチャーコンサートをさせていただいた。100名近い聴衆を前に、「おしゃべり」と「ファド」の弾き語り6曲（「難船」「悲しいポルトガル」「パイロネグロの少年」「アルファマ」「私の中のファド」「暗いはしけ」）で何とか休憩無しで2時間にわたる講演を終了した。最後は、どうしても歌いたくなって、ファドから離れたチリのフォルクロリスタ、ピオレッタ・パラの「人生よありがとう」で締めくくった。講演に来てくださった人たち、熱い想いで出演を依頼してきた河田和美さんへの感謝の思いが昂じてきた結果の思いがけない幕切れだった。

レクチャーコンサートの一件、それは、主催者の阿倍野学習センターの河田さんから届いた以下のメールから始まった。

「初めてメールいたします。本来は直接お電話でご相談させていただきたかったのですが、うまくご連絡がつかずに、メールで失礼いたします。月田さんのことは元上司でした、西本南海男さんにより15年前に知りました。その西本さんも他界されて3年が経ちますが、お元気だった頃にはサンケイホールやアートクラブでのライブは数回、三裕の館では貸切状態で最高に贅沢なライブも経験させていただきました。月田さんと出逢った瞬間、音楽のファドの神様が見えたように思いました。それほど月田さんが歌われるファドには感動を超えた魂を激しく揺さぶられる不思議な力を感じます。言葉ではうまく表現できないのですが、奥深いところから静かに、そして激しくこみ上げてくるものがあり、懐かしい気持ちとともに、その力強さに忘れかけていた勇気と優しさを思い出させてくれます。そんな月田さんご自身のファドに対する想い、伝えたい心を当センターの講座で語り伝えていただけたらと心からご出演をお願いしたく添付ファイルにて依頼書をお送りいたしますのでご検討のほどよろしく願いいたします。」

横浜のカルチャーセンターの講演を引き受けたのも、担当の石井洋子さんの「学術的というよりは、あくまでも月田様を感じるファドについて伝えていただきたい」という一言に心が揺らいだからなのだが・・・。両人の熱意が私の重い腰を上げさせたと言っていよう。とはいえ、座礁してしまっただけのような頃の私には、何が話せるのか、何が伝えられるのか、想像するだけでも怖くて逃げ出したい思いで一杯だった。後日、回収したアンケートが送られてきたが、かなりの反響のよさに、「やってよかった」と胸をなでおろした次第。根気よく私の話を聴いてくださった皆様、マイク無しの歌声に耳を傾けてくださった皆様、そして、私を引っ張り出してくださったお二方に、心から感謝している。

informação

- ポルトガルギターがなくなって、まず、マカオ観光局の仕事がなくなりました。現実の厳しさと非情さを思い知らされました。財政的にかなりの痛手ですが、幸い東京の「マヌエル」での定期ライブだけが残っています。残された仕事を大切に、一曲ずつ精一杯歌ってゆきたいと思っています。
- 早速に、ライブハウス、コンサート会場の情報等、お寄せいただいた皆様ありがとうございます。ライブコンサート実現までは道のりがありますが、どうか、これからも、長い目で、月田の活動を見守りつつけてくださいますようお願いいたします。
- 新宿のシャンソニエ「シャンパーニュ」のオーナーでもありシャンソンの訳詞で活躍されている「ムッシュ」こと矢田部道一氏の「[矢田部道一シャンソン詩集]コンサート」に出演することになりました。氏の日本語詩による「涙」(日本語のタイトルは「恋しくて」とギリシャの歌「ペレーの港の男達」(「日曜はだめよ」というタイトルでメリナ・メルクーリが歌ってヒットした曲です)を歌います。安奈淳、花田和子、井関正人さん他……シャンソン界の大御所の方々に混じっての出演です。

<月田秀子のスケジュール>

4月22日(土)	栃木・足利「南国食堂なんぷう〜」*要予約	予約・問合せ：tel/0284-44-4377 料金：3150円(食事・ライブチャージ込・飲み物別)
	①<食事>17:00~18:00 / <ライブ>18:00~19:00 ②<食事>20:00~21:00 / <ライブ>21:00~22:00	
5月5日(金・祭)	東京・新宿「シャンパーニュ」	予約・問合せ：tel/03-3458-9806 (月田秀子ファド倶楽部)
	開場：14:30 開演：15:00 終演予定：17:30 チケット：6000円(フリードリンク) ♪ギターの蓮見昭夫に加え、ピアノ伊賀拓郎が初参加。柔軟さに満ちた素直なピアノの響きは、必聴!!	
8日(月)	東京・渋谷「マヌエル」*要予約	予約・問合せ：tel/03-5738-0125 料金：6000円(ディナー・ライブチャージ込み)
9日(火)	東京・四谷「マヌエル」*要予約	予約・問合せ：tel/03-5276-2432
10日(水)	「NOITE DE SAUDADE Vol.30」	ライブチャージ：2500円(入れ替えなし)
6月5日(月)	東京・渋谷「マヌエル」*要予約	予約・問合せ：tel/03-5738-0125 料金：6000円(ディナー・ライブチャージ込み)
6日(火)	東京・四谷「マヌエル」*要予約	
7日(水)	「NOITE DE SAUDADE Vol.31」	ライブチャージ：2500円(入れ替えなし)
9日(金)	東京・新宿「シアターアップル」 「[矢田部道一シャンソン詩集]コンサート」	申し込み先：tel/03-3354-8540(ムジカ) チケット：S席指定7000円 / A席自由6000円
	開場：18:30 / 開演19:00	
11日(日)	大阪・大正「アゼリア大正」 “きまぐれライブVol.9” *別紙チラシ参照	問合せ：tel/06-6552-9713 チケット：3800円(全席自由) (月田秀子ファド倶楽部会員：3500円)
	開場：14:30 / 開演：15:00	お申込み：tel/06-6552-7053(喫茶「アルマ」井本)もしくは、月田秀子ファド倶楽部まで
7月3日(月)	東京・渋谷「マヌエル」*要予約	予約・問合せ：tel/03-5738-0125 料金：6000円(ディナー・ライブチャージ込み)
	開場：18:00 ライブ：20:30~(約1時間)	
4日(火)	東京・四谷「マヌエル」*要予約	
5日(水)	「NOITE DE SAUDADE Vol.32」	ライブチャージ：2500円(入れ替えなし)
	開場：18:00 ①20:30 ②21:30 ③22:30	

fados canções

ADEUS A LISBOA

Letra-João Villaret
Musica-A.Rodrigues

Vejo do cais, mil janelas
Da minha velha Lisboa
Vejo Alfama das vielas
O Castelo e Madragoa

E os meus olhos rasos d' água
Deixam por toda a cidade
Na minha prece de mágoa
Esta canção de saudade.

Quando eu partir
Rezo por mim, Lisboa
Que eu vou sentir, Lisboa
Penas sem fim, Lisboa.

Saudade atroz
Que o coração magoa
E a minha voz entoa
Feita canção, Lisboa.

Mas se ao partir
Me vires chorar, perdoa
Que eu digo adeus à tristeza
Para depois rir à toa.

Tenho a certeza, que ao ver
As ruas tal qual eu as vejo
E esse teu ar de rainha do Tejo
Hei-de beijar-te Lisboa.

Hei-de beijar com carinho
As tuas sete colinas
E vou andar a procura
De mim, nas tuas esquinas.

E tu Lisboa has-de vir
Aqui ao cais como outrora
P'ra eu te dizer a rir
O que hoje a minha alma chora.

リシュボアにさよなら

作詞 ジョアン ヴィラレト
作曲 A・ロドリゲス
訳詩 カウド ヴェルデ

波止場から見上げる幾千もの窓は
いとしリシュボアの目のよう
小路の入りくんだアルファマ
城、マドラゴアも見える

やがて私の目に 涙があふれる
別れを嘆く思いのなか
街のそこかしこに残る
この愛惜の歌

旅立つとき
私は打ち明ける
リシュボアよ お前との
別れのつらさは 尽きることがないと

どうしようもない悲しみと懐かしさで
心が疼く
そして私は口ずさむ
歌い慣れたあの歌を

もし別れのときに
泣いているのを見ても許しておくれ
悲しみにさよならを云っているのだから
そうすれば あとで笑みも生まれるだろう

ありのままの通りや路地を
私の臉にあざやかに甦る
テージュ川の妃のような お前の風情に
口づけせずにはいられない リシュボアよ

慈しみをこめて口づけしよう
お前の七つの丘に
そして そしていつの日か訪ね歩くだろう
自分の姿をお前の街角に路地に

そのとき リシュボアよ お前も姿を見せるのだよ
この波止場に昔のままで
私はほほ笑んでお前に語りかけるだろう
今日 私の魂が涙を流したことを



「ポルトガルギターのカロス・ゴンサルヴェス氏と」



<編集後記>

「負けない！」そう自らに言い聞かせても、次の瞬間萎えている自分がいる。その繰り返して春が来て、春が逝く。なかなか自由に飛ぶきっかけがつかめず、むなしく空を見上げる。ああ、またもや、ファンの皆様を不安にしまった感ひとしきり。少なくとも歌っているときは、自分が生きていると感じる。そんな時が持てるだけでも幸せに違いない。

月田秀子ファド倶楽部ホームページ
<http://www.fado.jp/>

- 月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第50号
- 2006年4月15日発行（季刊：年4回発行）
- 編集・発行「月田秀子ファド倶楽部」事務局
- 〒108-0075 東京都港区港南1-8-27 日新ビル1406号
- TEL&FAX 03-3458-9806